→ H3.12.9(月)
H7.3.25 柿の葉が紅葉しており、柿の花盛り

1,896

第二十八章　邪馬台国に現出した洛陽城

やめとのくに
邪馬台国の冬は短く、――もう春の香気が漂いはじめていた。正始二年（二四一）の春であった。

柔らかい日差しが粲粲と降り注ぎ、青海原の遥かかなたからそよぎ吹き来る風は鬢の解れ毛を靡かせ、通り過ぎていった。

群れなす カモメが飛び交い、有明の内海の穏やかな波がゆたゆたと寄せては返す。

梯儁は、今日もまた任吉の浜辺に降りてきて、海をながめていた。

有明の海にぼうとした春霞がかかり、雲仙岳の姿がうっすらと滲んで見えた。

見上げると、早春の北の空に、――――頼りなげな白い千切れ雲が一つ、行き悩んでいた。

岸辺の柳の一なやかな細枝は、もう春の気配を感じとっているのであろう。銀色の玉が心なしか膨らんできたように思われた。

コクヨ　ケ－20　20×20

「ああ帰りたい。柳芽吹くあの故郷へ帰りたいし

梯僑はつぶやいた。

へもう、どうあってもお暇乞いをしよう。

いま思い切って帰らなければ、このままずるずるなりそうに思われる。

行くのは忍びないが、私は全ての未練を絶ち切って、この神仙の国を去り、中国へ帰ろうぞ。

ああ、私の心は千々に乱れる。

古里よ。私を育んでくれた山や河よ。帝方の太守に復命したら、私は宮仕えを止めていー

ー懐かしい、父・母のもとへ帰りたい。

年老いた父上よ、そして母上も、いかにお過ごしか。お達者でおらるるか〉

と、虚ろな心に思うのだった。

＊

胸の内

コクヨ ケ-20 20×20

奏でる 元439P　「大あわてにあわって」　掌客 ㊤1594P　いきの ㊤1546P－3/4

1,898P－1/2

だが、

「いざ、おいとまを、――――」

と切り出すと、その梯儁の申し出はどうーたわけか、常に宙をさまようのだった。

伊支馬や彌馬升達は、梯儁に皆まで言わせなかった。

「そんなに急いでお帰りにならなくてもよろーいではありませんか」

「そ小とも、――――もしかしたら、私共に落度があったのでしょうか。どうぞ、なんなりとおっしゃっていただきとう存じます」

掌客たちは、慌てふためき、自らの手落ちでもあるかのように恐懼し、青ざめた顔で

梯儁の高ぶった胸中を宥めた。

「これ、大至急酒の用意をしなさい。急ぐのだぞ」

侍人達は、梯儁の心を楽しませるために、音楽を奏でい、次へと御馳走を運んでこさせてもてなした。美しい舞姫達に舞いを舞わせ、次から

（――――）

コクヨ　ケ－20　20×20

1,898P－2/2　はいり切りとす 前頁3行 然然 元946P　「姿を見ること」㊐1899P中ほど

梯偈は、口をつぐむしかなかった。
あまりにも、倭国の内懐深くへ入りすぎてしまったようだ。
梯偈はしきりと後悔するのだった。
さらに、かいがいしく梯偈のために心を込めてつくす赤せや、愛姫を見ると、――――――梯偈の決意は、脆くも崩れ去ってしまいそうであった。
いや、もはや、妻達に切り出してみる勇気さえ、消え失せていた。

＊

元1484P 喫む

「梯偵様は、ちかごろ御気分がすぐれないごようすです」

「うっうっうっとして、楽しまれることもなくなりすっかりふさぎ込んでおいでなのです」

そうした噂を聞いた難波米は、ある日住江の館へやってきた。

「おう、難波米殿。よくぞ、おこし下されたし」

梯偵は、難波米の姿を見た時、ほっとして涙を流さんばかりに喜んだ。

「難波米殿は、きっと力になってくれるに違いない」

と思ったからだった。

梯偵は、苦痛の胸の内を語った。

「私が倭国へまいりましてから、もうすでに、幾月幾日かが、あっという間に打ち過ぎてしまいました。貴国の人々の心からの歓待誠に有難く、本当に楽しいことばかりの日々でございます。

心病む 元790

是非無く 元1253

全ての未練を 絶ち切って 1897

心掛 元786 まっと 全うす 元2084

仮初 元470 その時限りであること

1,900 元1253

しかたがない

しかーし、年さえ改まった今に至ってさえもなお、こうして何不自由なく気楽に遊び暮してい(る)ことが、かえって心の重荷になってならないのです。

私は、私の務めを全うする為 ト どうあっても帯方郡へ還らなければならないと思うのです。

去り難い事ではございますが、私はあえて すべてに目をつぶりました。仮初にも私の妻となってくれた赤女や愛姫を倭国に残して行くのは忍びなく、心掛りではありますが 是非も無く、これにておいとま致しとうございます。

私は、帯方の太守に見えたその後に、一年老いた両親の安否をたずねて故郷へ帰り、孝養をつくしたいものと、心を定めている のです」

「切切と語る梯儁の声は震え、赤く泣きはらした目は悲しげに難升米を見つめていた。

「――――それほどまでに、梯儁殿は心病んで

コクヨ ケ-20 20×20

でおいでしたか。そのように心を傷めておいでだとは露知らず、梯偽殿にはもっともっと長く倭国にお留まりいただきたいとのみ考えていたのでした。

雅[illegible]やかな都ぶりをお示しになり、そして洛陽の都の種々のことどもをお教え下さった貴方様に、私達は心底より感謝しているのです。倭国中の誰もが、梯偽殿を尊敬申し上げお慕いしているのでございます。ですから、梯偽殿には、これからも長く長く御滞在お願いいたしたいものと切望していたのでした。

しかしながら、今、梯偽殿の御気持ちがよく分ります。万止むを得ないことと申さねばなりますまい。

でも、そうはいっても、私達倭人にとって掛け替えのない梯偽殿が、もう倭国を去っておしまいになるのかと思うと、私の胸は苦しくて、いまにも張り裂けんばかりでございます。

難千米の心からの悲しみは、その面にあり

1.901 — 2/2

ありと見えるほどであった。押しとどめようもなく溢れる涙が、難波米の頬を伝い、雫となって落ちていった。

「梯偵と共に居る時のあまりの少なさ」が、難波米には悔まれてならなかった。

「賓客を心から手厚くもてなす」ということが周の時代以来の礼儀であるというのに、――――難波米は、怠りさにかまけ大いに義理を欠いていたのだった。

難波米は、「己の不義理を考えるとき、心苦しく思わずにおれなかった。

「梯偵殿」

涙を振り払い、難波米はこう言った。

「お別れする[illegible]は、心切なく悲しいことでございます。しかし、是非にも帰郷したい」

とおっしゃる梯偵殿をいさめこれ以上お引き留めするのは、かえって礼儀に叶うものではありますまい。

「はいえ、梯偵殿。――――御帰国なさる前

に、どうか一目なりとも見ていただきたいものがございますが、いかがでございましょうか。

すでに御承知かも知れませんが、いま私達は、新しい都を築造中なのです。

その都は、魏国の洛陽の都とそっくり同じような大きさと様式とを誇る一大都城になる予定なのでございます。

もっとも、その新しい都・私共の洛陽の都は、慌しく急ぎ造り始めたばかりですので、まだまだ、いたらぬところが多々ございます。

今のところ、あの洛陽城とは較べくもありませんが、しかし、ささやかなりともこの邪馬台国の土産話にはなろうかと存じます。

様偶は、この邪馬台国の内で洛陽の都を見れるということに、大きく心を動かされた。

そして、

東海海中のこの小島に現出しようと洛陽の都を一寸見たあとで、中国へ帰ることにしてもよいではないか。どうせ急いで帰らなければ

ならないわけでもないのだから、〈――――〉

と、自分自身に言い聞かせてみた。

父や母のいる故郷へ心がはやるとはいえ、

〈あともう暫くの間倭国に留まって、その倭国の洛陽城を見てみたい。今はまだ完成していないとはいえ、実に素晴らしい[illegible]ではないか〉

と、梯儁は揺れ動く心の内に思うのだった。

難升米は、梯儁がそっとうなづくのを見ると、

「そうと決まれば、夜を日に継いで都城築造の作業を急ぎ、少しでも見映えがするように整えたいと思います。また、季節としてはもう少し暖かくなって、桃の花などの咲き競う頃が宜しかろうと存じますので、それまでこの住吉においてお待ち下さいますように」

と言った。

＊

コクヨ　ケ－20　20×20

赤女と愛姫

「倭国では、桃の花はいつ咲くのだろうか」

梯偶は、一方では桃の花が咲き乱れる日を待ち焦がれていた。

――しかし他方では、桃の花の蕾のふくらむのが一日でも遅い方がよいとも思った。

桃の花が倭国の春を彩るとき、梯偶は、倭国に別れを告げ、――妻となってくれた心優しい赤女や愛姫とも別れなければならないのである。

「赤女よ、そして愛姫よ。私のことを許しておくれ」

梯偶は心のうちに我が身を責めた。

ところがどうしたというのだろう。一日また一日と別れの日が近づいてくるというのに赤女も愛姫も、何故か浮き浮きしているように見えるのだった。

「赤女や。そんなにも沢山の葛籠に、錦などをびっしり詰め込んで、――――いったいどうするつもりなのだね」

「はい梯偶様。お義父様やお義母様をはじめ御近所の方々にも、手土産の一つも持って参らなければなりませんので、いろいろと品物を見繕い、少しずつ取り揃えているところなのでございます」

「えっ。お前は、この私と一緒に海を渡っていこうというのか」

赤女は、当然のことといった面持ちでうなづいた。そして言った。

「こうした物の他に、設馬国（投馬国、薩摩国）では父母が、白真珠や翡翠の勾玉などを用意してくれているはずでございます。それにしても、中華の国の貴婦人達の化粧の仕方など、早く知りとうございますわ」

梯偶は、驚きを隠そうともせずに赤女の顔をまじまじとみつめた。

赤女は、眼下を行き交っている船に目をや

1,905字－2/2

~~果てのない海~~ は 1909字 4行

知りとう 前良

素晴らしく 1202字

りながら、さらにこう言った。

「私、俊国を離れる前に、是非とも私が生れ育った南の設馬国に罷り帰って、お父上・お母上にお別れを申し、そして心の故郷・設馬国をもう一度、しっかり[illegible]見ておきたいと存じます。

常夏の国・設馬国の太陽はギラギラ[illegible]輝いて燃えるようですし、果てしなく広がる大海原は真青に澄み、白い波が岸辺に打ち寄せていて、言葉ではとても言い表わせないほど美しい国なのですもの――」

幼い日々を過した故郷に思いを馳せる赤せの目は、心なしか潤んでいた。設馬国での数々の思い出が、赤せの心の内に去来しているのであろう。

「ほう、そんなにも設馬国の太陽の日差しは強く、海は青々と澄んでいるのかい。きっと良い国なのだろうね、赤せの故郷は。」

そっと肩を抱き寄せて慰める優しい様俊の言葉に、赤せはにっこり[illegible]微笑んで、こう言った。

「設馬国の海では、鯛が釣れるし、堅魚も釣れるのですよ。そうよ。――ね、梯偽様。梯偽様も、南国設馬国へおいでになりませんこと。きっといい思い出ができると存じますわ。ね、ね。この邪馬台国から、南の設馬国までは、船でほんの十日程しかかからないんですから、――――」

「そうだね。赤女が私と一緒に中国へ行くというのだもの。私としてはどうあっても、設馬国へ参上し、お前の御両親に御挨拶せずばなるまいな」

「まあ、嬉しい。父上も母上も、洛陽の雅び男を家に迎え、きっと感激して喜ぶわ」

赤女の瞳は輝き、本当に嬉しくてならないといった様子であった。

＊

枚聞神社 ㊐ 2003-3/2

1.907-1/5 (天つ岩戸伝説)

開聞温泉 ブルー 218

温泉 風土記

スリリングブルーガイドブックス 216 世界中の遺跡

赤女は、心[illegible]はずませ、設馬国の[illegible]とにつ
やをこまごまと語った。梯偶は傍らにあって
にこにこと聞き入った。

・小さいけれども美しい姿をしている御神火
の山（今の開聞岳）のこと。

・透き通っていて底の知れない神秘的な湖
（透明度世界第七位の池田湖）のこと。

・あちこちに温泉が湧き出していて、湯煙が
もうもうとあがっていること。

・変った習俗を持つ隼人達のこと。

・その昔、祖先達が、設馬国の南の端に上陸
して、倭国の最初の足がかりとしたこと
などなど、話は尽きなかった。

そうよ。それで私達倭人は「設馬国」を
呉国や会稽に次ぐ心の故郷と考えて、とても
神聖視しているのです。

そうそう。御神火の山の北の麓には「玉乃
井」という井戸があるわ。その井戸は、
〈私達の祖先が最初に掘った倭国最古の由
緒ある井戸〉
として、今も大切にされているのよ」

開聞岳の北方約三㌔にある「枚聞神社」から

あれやこれ

1,907P-2/5

・カラー
右頁の上半分
はみ出して
大きく掲載
下さい。

↱原本の紙が折れ曲っております。
山の部分だけでも、目立たないように
お願いします。

うなぎいけ
鰻池 地名辞 229P

126P 開聞岳(かいもんだけ)　鰻池(うなぎいけ)　池田湖(いけだこ)

142P 写真図版 328 開聞岳(かいもんだけ)・池田湖(いけだこ)周辺(指宿市(いぶすき)上空(ぜうくう)から、南西(なんせい)を望(のぞ)む)

132P 『指宿市誌(いぶすきし)』指宿市役所、昭和60年10月25日発行、口絵参照。

1907P- 3/5

・カラー
・右頁の下半分

たまくしげ
玉匣 ㊐2075P 3行
櫛などの化粧用具入れ
㊐210P 1/2
㊐2003P 1/2

14QG
写真図版 329 美しい朱塗りの『枚聞神社』(開聞岳の北方約3Km)
13QG
『諸国名山案内』〔第8巻〕九州、足利武三、山と渓谷社、1994年8月20日改訂第1刷、18頁参照。
12QG
・社宝の玉手箱1組は、国宝。
・この神社から300mの田の中にある玉井は、日本最古の井戸といわれている。(「九州」深水宗孝、実業之日本社、218頁参照。

1,907P－4/5

・カラー

・左頁の上半分に掲載する。

㊐2003P－3/3 12行

↓上・中・下の黒い縦線トル

←シミトル

著作権許諾は、鹿児島県教委だけで結構です

14QG

写真図版 330 国宝の玉手箱〔枚聞神社社宝の松梅蒔絵櫛笥〕

下から4cm黒いヒトル　↑縦線トル（上・中・下）

13QG

鹿児島県教育委員会㊐文化財課（料アキ）提供

13QG

『九州』深水宗孝、実業之日本社、昭和43年発行、218頁参照。

12QG

・縦25cm、横31cm、高さ19cmの玉手箱の中には、鏡大小2個、櫛3個の他いろいろな化粧道具が入っている。

1,907 P — 5/5

・カラー
・左頁の右下(1/4頁)に掲載して下さい。

第7巻651頁の写真
↕
・写真図版471(前漢代の井戸)と似ている。
・水汲みのための木製あるいは金属製の轆轤が取り付けられていたのではなかろうか。
・火山灰が降りつもり、中央の石が据え増しされたのかも知れない。
・鳥居状の部材が木製なのか石製なのか未確認。

140G 写真図版 331 玉乃井(開聞岳北方約3キロ)

133 130G 鹿児島県教育委員会 文化財課 提供

120G
・「我が国最古の井戸である」と言い伝えられている。
・「倭人達が渡来して一番最初に掘った井戸である」という意味なのだろう。 (第6巻) 36P

8

・カラー

・左頁 左下（1/4頁）に掲載。

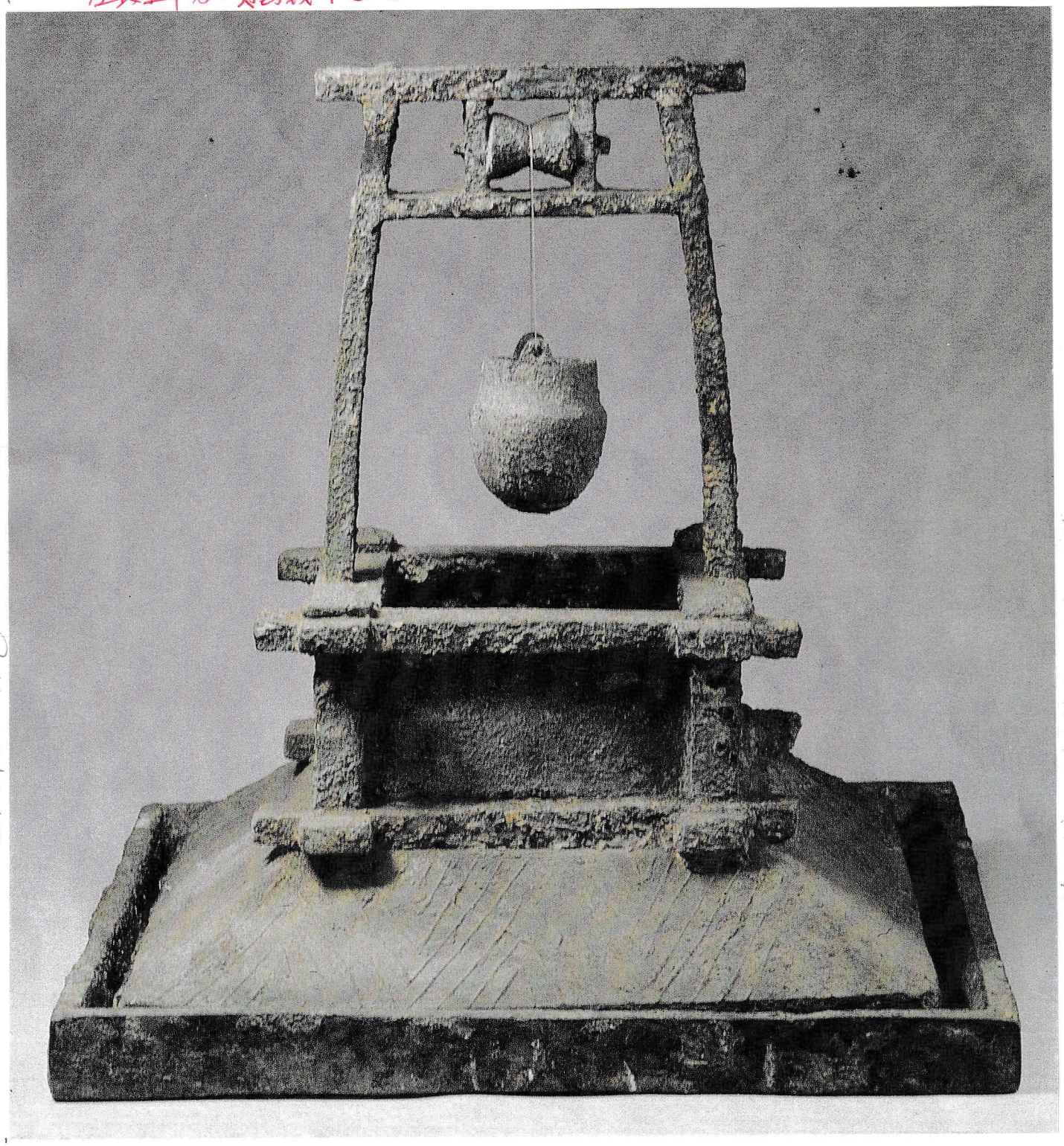
1,908P－1/3

＊ 1,907P－5/5 写真（王乃井）の補足写真です。

（第6巻）37P－1/2

大カン7 66頁
井 井戸
ふうせい

・左頁上半分に大きく掲載下さい。



140G 写真図版471 前漢(前202~後8年)の墓から出土した井戸の模型

130G 『中国 仙人のふるさと』大阪府立弥生文化博物館、1996年10月発行、70頁参照。

120G

・高さ49.5cm。1969年山東省済寧市出土。山東省博物館蔵。

・方形の井筒の上に井架が取り付けられ、上にくびれ式の轆轤が設置され、丸底の銅罐が一つ吊り下げられている。

・この種の轆轤井は、漢代の関中地区(現陝西省)で、かなり広く用いられていた。

・写真図版331 玉乃井(鹿児島県開聞岳北方の井戸)と似ている。 第6巻36頁

35

三〇〇㍍ほど離れた田のなかにある「玉乃井」は、日本最古の井戸といわれ、伝説では神代のむかし、豊玉姫が使ったものと言い伝えられている。

（「九州」昭和四十三年版、実業之日本社、二一八頁参照）

■なお清少納言は、全国各地の井を集め、「井はほりかねの井。玉の井。云々」と詠んでいる。（枕草子「一六三段」「枕草子」（下）石田穣二訳注、角川文庫、一九五頁参照）

ここにいう「玉の井」は、山城国綴喜郡井手の玉水にあった井戸のことであろう、と通常考えられている。

しかしあるいは、日本最古の井戸（後国創建時にまでも溯る歴史を秘めた薩摩国の「玉の井」）を重ね合わせ考えてみる必要があるのではなかろうか。

清少納言は、すなわち、表向き山城国の山吹の名所である「玉の井」を思わせながら、実は薩摩国の「玉の井」について述べているのかも知れない。

とはいえ、確認のしようもないことである。

耳八方 ㊥1922 2行

臨終 1954。 1,908 −3/3 仰天 574

伊支馬 ㊥1546 −3/4

とそんな時、彼方に伊支馬の姿が見えた。梯儁は手招きして伊支馬を呼び寄せると、こういった。

「伊支馬殿。私は、邪馬台国の新しい都落に招聘していただいた後、南の設馬国を訪ね、一一一倭国の東の海をぐるっと廻って帰国することに致しました」

「え。何ですって」

伊支馬は、驚き、自らの耳を疑った。しかし梯儁は仰天している伊支馬の問いかけに答えず、こう尋ね返した。

「予備知識として、設馬国のことについていろいろ聞いておきたいのだが、長官は何という名であろうか」

「はい、長官は彌彌と申します。そして御存知のとおり、副官は、赤せ様の御父君・彌彌那利殿でございます」

「して、設馬国の戸数は如何ほどかな」

「五萬餘戸でございます」

梯儁は、いままたこれ等のことを几帳面に

天武紀10年8月 紀下448 多禰の島

魏志倭 49 後漢書 59

1,909

上在する 1915 果てない 1905 3/2 8行 「はい」前項

書きとっていった。

「設馬国は倭国最南端の国だそうだが、設馬国の南に国は無いのだろうか」

「はい。設馬国の南には、洋々とした大海が広がっていて、――――――聞くところによりますと、この南海の只中に、無数の島々があり、それぞれに小さな国を成しているということでございます」

「そうですか。――それでは、それらの国々のことについて、知っているところを何なりと語ってくれないか」

「そうですねェ。――――――あ、そうそう、女王国の南四千余里のところには『侏儒国』（こびと国）という国があって、何と、人の長は三・四尺だということです」（『魏志倭人伝』・『後漢書倭伝』参照）

「ほう、それは奇妙だ。そんな国があるのか」

なお、女王国より南四千余里（一里＝三〇メートルとすると約一二〇キロ）の国といえば、『翫島』（こーき島）か、設馬国（薩摩国）の南の『種子島』（多禰嶋）あたりであったように

魏志倭 49「侏」 40

次頁の種国、黒歯国に合わせる

コクヨ ケ-20 20×20

も思える。

しかし、いうまでもなくそれとながら、「倭国」が一体どこに有ったのか、それとも全くの想像上の国だったのか、分かるわけはないことである。

また、〈倭儒国（こびと国）に、背の低い三・四尺（七〇センチ～一メートル）の人々が住んでいた〉というのは、あまりにも〈作り話〉めいた話である。後人達が面白おかしくそう言っていたのだろうか。

たのか、それとも「倭儒国」と記されている国名を見た中国人が〈三・四尺の人々〉を空想したのか、等といったことについても詳らかにはできない。

「それから、こんなことも聞いております。

――――倭儒国から船で東南に一年ほど行ったところには、「裸国」・「黒歯国」などという国々があって、使驛の停うる所は此に極まると申します」（『魏志倭人伝』『後漢書倭伝』参照）

「なかなか愉快な名の国があるんだな。行

けるものならば行ってみたいような気もするけれど、往復して二年もかかるようだと、ちょっと寄ってみるという訳にもいくまいな。

ま、ーーー南の国々を訪ねるのは諦めるとして、私は、設馬国（薩摩国）から倭国の島の東海岸に沿って北上し、伊邪国（宇佐国）に在すという男王にお会いしたい。

倭国の女王の男弟であるというその男王に恐ろしな御挨拶を申し上げて、これからの魏国との誼をお願いしなければならない、と思うからです。

伊支馬は、驚嘆し呆れるばかりだった。

米

赤女は、夫梯儁を故郷へ迎えるに当って、何かと準備しておきたいと思った。

こうして赤女は、一足先に設馬国（薩摩国）へ帰って懐かしい父母のもとで別れの時を過ごし遅れてやって来る夫、梯儁を待つことと

H30(2018)5.12(土)～5.13(4回)
H31(2019)1.14(月)～1/14(3回) 愛姫のつめり国 1979P
令和元(2019)6.20(木)～6.20(3回)
令和2(2020)1.27(月)～1.28(4回)
令和2(2020)10.9(金)～10.11(4回)

宗治の愛姫 418P

1.911P－2/2

なった。

すなわち梯傷は、桃花の頃の借別の宴に主賓として招かれ、邪馬台国の都人達に別れを述べた後、――――！邪馬台国から船で十日程南へ下ったところにあるという設馬国（薩摩国）を訪ねて行くことにしたのだった。

「それでは梯傷様。むこうでお待ち申し上げておりますわ」

赤女は、こう言うと船上の人となり、南を指して消えていった。

遠ざか

＊

赤女が去っていった後の侘吉の館は、がうジとして寂しかった。

梯傷は、愛姫の居所に常時寝起きして、時を過ごした。

＊

1/11 1F 1/10 1/10

コクヨ ケ－20 20×20

蟬涙　三口文Ⅱ－303ｐ下を　1912ｐ　ふづくえ 小林456ｐ 文机 書物をのせて読み書きなどする机 ←国1904ｐ

見聞録

梯僑は、いまはもう、その日の来るのが待ち遠しくて、――日々、庭に出ては桃の木の下に立ち、ふっくらと膨らみ始めた蕾を見上げた。

そして、部屋へ戻ると文机（読み書きする机）に向かいながらいままで書きためた覚え書きをもとに、一心に報告書を認めていった。

難升米の勧めにしたがって、新しい都へ赴き、その『洛陽城』の様を目にしたら、すぐにでも設馬国（薩摩国）へ向かわねばならないとの心であった。

その機を逸せず、女王国（邪馬台国）を後にしなければ――もう帰国する好機は、やってこないように思われるのだった。

荷物などはすでにとりまとめてあって、いつでも、即刻出発できるようになっていた。

こうして、親魏倭王倭国についての見聞を逐一記述したこの報告書は、ほぼ体裁を整えこのまま提出してもおかしくないばかりのものとなった。

＜中国では　これまで＞東海海中に絶在

結盟 元695P　事柄 元814P　間柄 元9P　諸事 元1120P　いろいろのこと　読み返す 元2289P

1,913P−1/2

する倭国のことが、朧ろげにほんの少しばかり分る程度だった。

しかし、これからは、この見聞録によって、親魏倭王の称号を与えた同盟国『倭国』の実情をかなり詳しく理解できるようになるだろう。

梯儁は、自ら書き認った文書を読み返しながら思った。

＊なお、

〈『魏志倭人伝』景初二年六月条以前にみられる梯儁以外の中国人が見聞録を書いたなどとは考えにくい。〉

＊

〈それにしても、そもそも見聞録というものは、中国人の風俗習慣と違っている諸事を列記してこそ興味深いのであって、中国人とほぼ同じ風習を持つ貴人達のことについて多くを述べてみても蛇足にすぎないというものだ〉

〈ほとんど意味が無く〉

と梯儁は心の内に思うのだった。

だいいち、魏国と倭国とは古くから同盟の間柄であって、倭国からの使者の身なりや言葉等については、魏国内においてすでに知

ことわり断り 元819P

1,913P－2/2

次頁から

られている。

そこで梯儁は、中国社会において未だ知られていない点についてのみ述べることとし、

◎「倭国の貴人の習俗」

◎「倭国の俗人の生活習慣」

について、注意深く区別しながら記述していった。

つまり、梯儁は、――倭国の俗人に関する記載の際には、「俗」と[redacted]わざわざ断り書きを加えたのだった。

◎もっとも、いうまでもなく、となりから、梯

㊐152ページ-3/4左　輯 集める　小林952ページ　こと

1,914ページ-1/4　2630ページ

白文 ㊐1914ページ-4/4 5行

前頁に

倩が詳述した「原本」は絶えてしまって伝わらず、『魏略』によってその概要を知ることが出来るだけとなった。

そしてその後、『魏略』を基として、『魏志倭人伝』が著述され、引き続いて、『後漢書』・『晉書』・『梁書』・『隋書』・『北史』などにも引用されていった。

とはいえ、いつの頃のことであったろうか、『魏略』は、消失した。（既述）

こうして現在では、『魏志倭人伝』『後漢書倭伝』『晉書』『梁書』『隋書倭国伝』『北史』などを参考にして、『魏略』およびそのそのの原本のおもかげをしのぶことしかできないようになってしまった。

なお、張鵬一氏の『魏略輯本』はその逸文を集めたものである。

そのほか、『前漢書』地理志の顔師古注にひくところや、日本にのみ伝存している唐の張楚金の『翰苑』巻三〇に、『魏略輯本』にもれた逸文がみえている、

唐代の学者

こと　㊐1914ページ-4/4 4行

コクヨ　ケ-20　20×20

㊥1525P-1/3　1.914P-2/4　㊥1525P-1/3　北史㊥1914P-3/4　「それにしても」↓㊥1913P-1/2

という。（「岩波文庫」四三七〇、岩波書店一七〜一八頁参照）

■ところでここに、少々気になるのは、「唐代に書かれた『翰苑』および『北史』にそれ以前の史書には見られない記事が載せられている」ということである。

例えば、

①『魏志倭人伝』には、

「到伊都国、――――有千餘戸、世有王、皆統属女王国」

とある。

ところが、唐の張楚金の『翰苑』巻三〇には、

「到伊都国、戸萬餘、――――其國王皆属女王也」

と記されている。

すなわち、伊都国の戸数に大きな差が見られる。（第二十一章「柄渠觚（日桙）」の項において既述）

②また、唐の張楚金の『翰苑』には、

「邪屋、伊都傍、連斯馬」

とーるされている。

（邪屋が、伊都の傍らにあって、斯馬に連なっている）

といった意味である。（「まぼろしの邪馬台国」宮崎康平、講談社、一七三頁参照。第二十一章（伊都国の中に、柄渠觚（日桙）の国）の項において既述）

③さらに、唐の李延壽（生没不詳）によって撰せられた「北史」（二十四史の一。北朝の魏・斉・周・隋の歴史を一つにまとめたもの。一〇巻）に、

「正始中、卑彌呼死す」

とある。

北史のこの「正始中、卑彌呼死す」という記事が、もし確実な記録にもとづくものであれば、卑彌呼の死は正始八年（二四七）か、正始九年（二四八）であったことになる、という。（「女王国の出現」小林行雄、文英堂三〇二頁参照）

H30(2018)5,13(日)～5,13(4回)

下

1,914字－4/4

第7巻 (末)2188字(今)1527字
正始中元年 まに進ずる

あるいは、もしかしたら、

・唐の張楚金の『輸苑』

・唐の李延壽の『北史』

が完成した後に、『魏略』は忽然と消え失せてしまったのかも知れない。（第三十四章〈卑彌呼の死〉の項参照）。

＊

(末)1914字 9行
消失

コクヨ ケ-20 20×20